

中東の宗教：アラブ調査室

「中東の宗教」全6回、

第6回 6月24日 オンライン配信 (15:00~17:30)

中東の宗教・・・イスラームの日常生活と他宗教共存

(担当：塩尻和子、アラブ調査室長、筑波大学名誉教授)

1、中東地域の特徴：最古の文明の発祥地

中東地域は、人類の文明史上、最古とされる都市文明、メソポタミア文明が発生した場所である。ティグリス・ユーフラテス両河流域に前3400年頃、都市文明が成立した。この地域はエジプトと並んでオリエント文明の中心地域となる。この地域にはアッカドやシュメールと呼ばれる土地にセム語系、インド・ヨーロッパ語系などの民族が興亡し、バビロニア、アッシリア、ペルシアなどの古代国家が成立した。

メソポタミア文明は、人類史上、最初の農耕や牧畜を開始し、青銅器を開発して武器や道具をつくり、楔形文字を用いて文書を残し、初期の宗教儀礼を制定し、ギリシア・ローマに受けつがれる六十進法や陰暦の暦なども発明した。その後、数千年にもわたってオリエント一帯に伝播することになる神話をも編み出した。

その後、この地域から後世にユダヤ教となる一神教の原型が発生し、その伝統に基づいてキリスト教、最後にイスラームが成立した。この地域が、今日の世界の主要な一神教の揺籃の地となったことは、重要な点である。

中東地域はこの人類史上最古の都市文明、メソポタミア文明を作り上げた土地である。そのため、古代から受け継がれた多くの文化や宗教、伝統や風俗習慣などが、現在も地域のあちこちに残っている。つまり、メソポタミアで発生した各種の宗教的伝統とそれに付随する文化的伝統が今日の宗教を作り上げたのである。

中東地域はアラブ系住民が多数を占めている国々（サウジアラビア、アラブ首長国連邦、イラク、シリア、レバノン、ヨルダン、エジプトなど）を主とし、若干の非アラブ国（アラブ系人種ではない多民族が居住している国）として、トルコ、イスラエル、イランを含む。

現在の宗教事情では、中東諸国の多くはイスラームを国教とし、住民の80～90%はイスラーム教徒である。例外として、レバノンでは国民の54%がムスリム、40.4%がキリスト教徒、5.6%がドゥルーズ派であり、マロン派のキリスト教徒が住民の約30%に達し、また全域にわたってコプト正教会、シリア正教会、ネス

トリウス派教会、アルメニア使徒教会、ギリシア正教会、ローマ・カトリック教会などのキリスト教諸派の信徒が散在する。非アラブ国では、トルコが政教分離を行なったが、イスラーム教徒は依然として90%以上と多く、イスラエルはユダヤ教徒が大多数を占め、イランにはイスラームの分派のシーア派12イマーム派が多い。

イランでは、90%が国教のシーア派十二イマーム派であり、9%がスンナ派である。イランには、そのほかにイスラーム以外の少数派が存在しており、主なものはユダヤ教、ゾロアスター教、キリスト教諸派、バハーイー教、バーブ教などが存在する。イランは紀元前3000年から、広大なペルシア帝国を築き上げ、各地との交流によって多くの文明を発展させただけあって、数多くの宗教も出現したが、そのなかでもゾロアスター教は、紀元前6世紀から紀元3世紀に成立したサーサーン朝の時代まで続き、イスラーム以前のイランの国教でもあった。今日も、世界中のゾロアスター教信者は約10万人と推計されていて、インド・イラン・欧米圏に住んでいる。イランではゾロアスター教、キリスト教、ユダヤ教は厳しい制限があるものの、信教の自由は保障されているが、バハーイー教とバーブ教は禁止されており、イランでは迫害を受けているとされる。

ユダヤ教、キリスト教、イスラームといった同じセム系の伝統上に発生した一神教の出現以前はイラン以外にも、この地域には多種多様な多神教が存在していた。ナイル河畔の古代エジプトでは太陽神崇拜や自然神、動物神の崇拜が行われ、多くの神話、祭式が一神教の登場まで続いた。現代でも、ユダヤ教、キリスト教、イスラームのほかに、古来の伝統を守る少数の宗教集団が存在する。

2, 保護民政策

イスラームとユダヤ教の関係は、預言者ムハンマドとマディーナのユダヤ人との間に生じた抗争によって最初からよいイメージでは語られてこなかった。ムハンマドはこの抗争事件には極めて厳しい態度で臨み、そのために礼拝の方向キブラをエルサレムからマッカへと変更したほどであった。この事件を契機にイスラームはユダヤ教、キリスト教から独立した宗教としてその独自性を確立していった。

しかし、新宗教が成立したごく初期の困難な時代にこのような事件があっても、イスラームはユダヤ教徒とキリスト教徒を、ともに同一の神の啓示を受けた民として「啓典の民」と呼び、保護する政策を採ったのである。第3代カリフ、ウマルの時代に制定された「保護民規定」は文言上は厳しいものであったが、実際にはユダヤ教徒もキリスト教徒も共に保護民（ズィンミー）として一定の税金を納めれば信教、職業選択、移動などの自由が与えられた。

イスラームの教義では、ユダヤ教徒とキリスト教徒は、イスラーム社会のなかでは保護民、ズィンミーとして一定の税金を納めなければならないものの、信教、職業選択、移動などの自由を保障されていた。この規定は、融通が利くものであったようで、ユダヤ教徒とキリスト教徒を「啓典の民」として保護するだけでなく、星辰信仰を持っていたと伝えられるサービア教徒や、善と悪の二原理を信じるゾロアスター教徒もこれに含めることがあった。彼らはイスラーム支配下では、保護民（ズィンミー）として財産の保護を受け、信教や移動などの自由を保障されていた。実際には彼らだけでなく、多神教徒とされるヒンドゥー教徒や仏教徒も保護民扱いを受けていた。

この社会システムは、中東地域に領土を切り分けて設立された国民国家が成立する近代まで、長期間にわたって機能的に運用されていた。中世のイスラーム支配下の中東地域では、哲学、文学、化学、薬学、医学、天文学など多岐にわたるイスラーム科学が発達したが、これはギリシア科学を受け継いだことと、イスラーム以前からその土地に存在したユダヤ教、キリスト教、ゾロアスター教、ペルシア文化、インド思想など先住文化から大きな影響を受けたことによって成立し発展したものである。イスラーム科学はイベリア半島においてさらに華々しい発展を遂げ、やがて、その影響を受けて地中海世界やヨーロッパでスコラ哲学が成立しルネッサンスが展開したことは周知の事実である。

3、アッバース朝下のユダヤ教

西暦 661 年に成立したウマイヤ朝はアラブ人を中心とした政策を行なったために「アラブ帝国」と呼ばれるが、初期の公用語がギリシア語であったことは興味深い。750 (749 年) 年に始まるアッバース朝はイスラーム教徒であれば出自や民族を問わない政策を採用したために「イスラーム帝国」と呼ばれる。そのために保護民政策がもっとも有効に作用したのはアッバース朝期であったといえることができる。9 世紀はじめ、第 7 代カリフ、マアムーン (在位 813—833) の治世にバグダードに国際研究機関「知恵の館」が建設され、半ば忘れられていたギリシア科学のアラビア語への翻訳事業が展開された。ギリシア語著作の多くはすでにシリア語に翻訳されていたので、必然的に翻訳官の多くはネストリウス派のキリスト教徒であった。そして、このアラビア語訳のギリシア思想がユダヤ教徒に大きな影響を与えたのである。まさにアッバース朝期の思想界はギリシアの科学を仲介にしてイスラーム、キリスト教、ユダヤ教が円陣を組んだように見える時代でもあった。

イスラーム支配地に住むユダヤ人は離散の民 (ディアスポラ) ではあったが、決して迫害された不幸な民ではなかった。彼らの共同体は、アッバース朝支配下でも、イスラーム・スペインにおいても、膨大なタルムードの研究をはじめ

としてさまざまな文芸を興し、ユダヤ哲学を花開かせた。5世紀末にガリラヤ地方に残存していたユダヤ教徒集団はローマ帝国に迫害されて滅亡したが、バグダードに残った「バビロニアのユダヤ教徒」はイスラームの保護の下でイエシヴァと呼ばれるタルムード学院を二校（三校という説も）運営し、膨大なバビロニア・タルムードの研究と編纂作業を継続することができたのである。

イスラームとユダヤ教という、現在の世界では運命的な敵対関係にあるとみなされている二つの宗教集団が、過去において、決して容易ではない状況下でありながら、平和的に共存して高度な文明を作り上げていたという事例を謙虚に学ぶことによって、新たな文明の対話を可能とする手がかりを模索するための試みとなることを願うものである。

4、オスマン朝のミッレト制度

ミッレトとは、オスマン帝国で、同じ宗教を信奉する人間集団あるいは共同体をさす呼称であるが、イスラームがキリスト教徒とユダヤ教徒を「啓典の民」として信教、職業、移動などの自由を認めていたことにより、オスマン帝国のミッレト制もこの伝統を忠実に継承した。帝国支配の当初からイスラーム、ギリシア正教、アルメニア教会、ユダヤ教のミッレトが設けられた。宗派や民族区分を考慮にいったミッレトが設置され、トルコ人はアラブ人とともにイスラームのミッレトに所属した。それぞれのミッレトでは、彼らが信仰する宗教の規範に従うことが要請されており、人びとの民法レベルの日常業務をミッレト管長の監督と裁量で処理することが許された。ミッレト管長は、その宗教・宗派の最高幹部でもあり、帝国の統治意思を信徒に伝える役割も果たした。ミッレト制度は時代により、区分により、様々な形態をとっており、一様ではなかったが、宗教共同体の公的組織や機構の意味も含まれていたとみられる。

オスマン帝国のミッレト制度がどの程度、効果的に実施されたのかどうかについては、各論があるが、「経典の民」の思想が、帝国が滅亡する1922年まで、機能的に運用されてきたことは事実である。

5、セム的宗教の伝統

マッカ巡礼（2022年のハッジ月（ハジラ）は6月1日から7月29日まで）

イスラーム教徒にとってはマッカ巡礼に出かけることは、信徒としての基本的な義務でもあり、一生の願いでもある。ヒジュラ暦の12月、「巡礼月」7日からの4、5日間に聖都マッカを中心にしてさまざまな行事が行なわれる。新聞などの報道によると毎年200万人を超える信者が世界中から集結する。巡礼月に行なわれるこの巡礼は「大巡礼（ハッジ）」と呼ばれて不定期に行われる小巡礼（ウムラ）とは区別される。人種も国籍も異なる信者たちがイフラーーム

という白い巡礼服を身にまとして、カアバ神殿をいっせいに回る光景は、その人数の莫大さと宗教的情熱による熱気から、イスラームに独特の宗教伝統であると思われがちである。たしかに、マッカ巡礼に関わる行事や儀礼の多くは先行するセム系宗教ではなく、むしろアラビア半島に伝わる習俗などから受け継いだものが多い。たとえば、悪魔の柱に小石を投げつける悪魔祓いの行事や、聖なる黒石を納めたカアバ神殿を左回りに七回巡行（タワーフ）することなどは、イスラーム以前のアラビアの風習でもあった。

石投げの儀式というのは、ヒジュラ暦 12 月 10 日に、日の出とともにミナーの谷へ向かい、谷間に設置されている三本の石標のうち、最も大きい石標に 7 個の小石を投げつける行事である。この石標はイブラーヒームとその息子イスマーイールに降りかかった悪魔の誘惑の故事に由来し、その石標に小石を投げることによって悪魔を追い払うことができるといわれている。イブラーヒームとは旧約聖書の創世記にイスラエルの祖として登場するアブラハムのことであり、息子イスマーイールは聖書ではアラブ族の祖となったイシュマエルのことである。石投げの儀式自体はアラビア半島の伝統に従ったものであるが、そこには旧約聖書の伝統も生きているのである。

犠牲祭の由来

巡礼の最終日にあたるイスラーム暦の 12 月 10 日は犠牲祭となり、全世界のムスリムは動物犠牲を捧げて祭礼を祝うが、巡礼者も聖地にあつて犠牲を捧げる。一般には羊を屠って犠牲とするが、この行事もイブラーヒーム（アブラハム）とその子イスマーイール（イシュマエル）の故事に由来する。

クルアーンによれば、イブラーヒームは年老いてから授かった息子が青年になったある日、彼は息子を犠牲として神に捧げる夢を見て、それが神の意志であると悟った。彼がイスマーイールを殺して犠牲に捧げようとした、まさにその時、神はイブラーヒームを制して、イスマーイールの代わりに羊を犠牲にするように命じた。同様の物語は旧約聖書の創世記 22 章に見られる。創世記ではアブラハムの息子はイシュマエルではなく、正妻サラの産んだイサクになっている。

イスラーム世界でもっとも重要な祭礼として毎年盛大に祝われる犠牲祭は、このように旧約聖書とクルアーンの双方にまたがる由来を持っている。イブラーヒーム（アブラハム）はイスラームだけでなく、ユダヤ教、キリスト教においても、宗教上の礎であり、最初の一神教徒である。それゆえにこそ、イスラームの神もユダヤ・キリスト教の神も「イブラーヒーム（アブラハム）の神」なのである。現在まで、アブラハムとその息子にまつわる犠牲祭を祝っているのは、ムスリムだけということになる。

6、ラマダーン——断食・齋戒

(2022年のラマダーン月は4月2日から5月1日まで)

断食は六信五行のうちの五行のひとつで、基本的な義務の儀礼行為である。

断食(サウム)とは、イスラーム暦(ヒジュラ暦)第九月(ラマダーン月)の一ヶ月間に、日の出から日没まで、飲食を絶つとともに喫煙、性交などの人間的な欲望から身を清めることで齋戒ともいう。イスラーム暦は純粋な太陰暦で、太陽暦と比べれば一年にほぼ11日少ない。暦が季節と一致しないために、ラマダーン月が真夏に来ることもある。信者は喉の渇きを耐え忍びながら、神の日ごろの恩恵への感謝と、貧者への思いやりを涵養する。ほぼ一〇歳までの子ども、病人、妊婦、旅人、戦闘中の兵士などは断食を免除される。なお、太陽暦が一般的になる前まで世界中で、「一日は日没から始まる」と考えられており、イスラーム暦もこれに従っている。

イスラーム暦九月のラマダーン月の一ヶ月間、日の出から日の入りまで太陽の出ている間は齋戒の時間と考えられており、あらゆる飲食や快楽を絶つという修行である。昼間は齋戒の時間と考えられているので、性交も禁じられる。普段、ワインやビールなどの酒類をたしなむ人も喫煙する人も、さすがにこの期間には昼夜を問わず禁酒・禁煙する。

文字どおり厳格に飲食を断つために自分のつばも飲み込まない人もいる。夕食の用意をする家族も味見をしないか、してもすぐに吐き出してしまう。

昼間の間は飲食をしないとえば、この一ヶ月でかなりやせるに違いない、肥満の人のおおいアラブでは、きっとよいダイエットの期間になるにちがいないと、私たちは考えるが、実際には、この期間の食料消費量は普段の月の二、三倍にもなり、夜間にお腹いっぱい食べるので逆に太ってしまう人がおおい。各国の政府はラマダーン期間中の食料供給を順調におこなうために数ヶ月前から備蓄を開始すると聞いたことがある。

断食は、本来は厳しい齋戒の修行期間であるが、同時に楽しい祭りの期間でもある。普段は午後7時ころには閉まってしまう商店街も深夜まで開いているし、日没後の食事をすませた人々は、家族や友人たちと夜遅くまで街路に出て楽しむからである。街では商店も個人の家も、ファヌースと呼ばれる色とりどりのランタンで飾られて、クリスマスを連想させる。

「ラマダーン」は単なるお祭りではなく、義務の宗教行事であるため、その行為には深い宗教的な意味がある。食欲などの欲望を制御して身体と心を浄め、神の恵みに感謝し、忍耐力を養い、そして飢えに苦しむ人々にも思いを寄せることが求められる。神に感謝しなさいとか飢えている人々の気持ちになりなさいと何百回言う代わりに、実際に自分で飢え体験してみて分かるようになって

いる。イスラームが世界で広く信仰され実施されている秘密は、このように難しい教理でなく誰でもわかるような形で信仰の本質が会得できるところにもあると思われる。実際「ラマダーン」の期間中には、貧しい人々への施しを積極的に行ない、通り沿いに野外テーブルを設けて貧しい人々に食事をふるまう光景がよく見られる。

ラマダーン月の第27日は神からムハンマドへ最初に啓示が降された日とされる「ライラト＝ル・カドル」(カドルの夜)で、この日はムスリムにとって「ラマダーン」期間中、最も神聖な日となっている。西暦610年のカドルの夜に、洞窟で瞑想に耽っていたムハンマドに大天使ガブリエルが現れて、神の言葉を「読め!」と命令したという故事に基づいている。「カドル」とは「力」や「運命」を意味するが、神の全能性をしめす言葉でもある。そのために「カドルの夜は千の月よりも優れている」(クルアーン97章)とされる。

7、イフタール(断食月の食事)の楽しみ

日没を知らせるアザーンがモスクやテレビ、ラジオから流れてくると、待ちに待った食事、イフタール(その日の断食・齋戒を終える食事)の時間である。日没のアザーンが始まると、一日中、空腹と喉の乾きに耐えてきた人々は、まず神の名を唱えてから、乾燥果物をつけた水を一杯、ぐっと飲み干す。それから美味しい食事にとりかかる。日没の礼拝は、一般にはイフタールの食事をおえた後におこなわれる。イフタールの前に礼拝をする人もいるが、日没後にできるだけ早く食事をとることが勧められているからである。

ラマダーン月の断食は、10歳以下の子供、妊産婦、病人、旅人、交戦中の兵士、などには免除されているが、免除の条件がなくなったら、普段の月であっても、おこなわなかった日数分だけ断食をおこなって規定の日数を取り戻しておくことが求められている。第三次中東戦争では、ラマダーン中に作業能率が落ちるのを見越して、イスラエルがエジプトを攻撃したこともあったといわれている。交戦中の兵士は断食を免れているはずなのだが、敗戦の原因をあやふやにするためなのか、まことしやかに伝えられている話である。

また上に挙げた免除条件のほかに、禁止事項として生理中の女性は断食をしてはいけないと決められているので、断食を行うことができなかつた日数だけ、あとで取り戻しておかなければならない。

8、慈善の食事

断食期間中に大都市では、道路にテントが張られ、無料でイフタールの食事が提供される。ラマダーン月におこなう善行には功德がおおいと考えられている。この期間に貧しい人々に施しをすることはとりわけ称賛される善行なので、

裕福な商人などが食事を施すのである。カイロでも、「7月26日通り」などの大通りの中央に巨大なテントがけが作られ、細長い机が並べられる。日没が近づくと水の入ったコップと平たいアラブパンが山のように積まれて食事の準備が始まる。かなりご馳走のようで、美味しい匂いがあたり一面に漂っていた。

イスラームの主な祝祭は三つあるが、最大の祭りで「大祭」と呼ばれるのはラマダーン明けから2ヶ月と10日後にくる犠牲祭であり、ラマダーン明けは「小祭」と呼ばれる。これに預言者ムハンマドの誕生日が加わって、主な祭りが三つになる。この中では、「小祭」ではあっても、やはりラマダーン明けの祝祭がもっとも喜ばれる。祭日の休暇はラマダーン明けと犠牲祭がどちらも三日間くらい、ムハンマドの誕生祭は一日程度である。

ラマダーンの期間中は、昼間は飲食に加えて喫煙や性交などの人間の欲望が禁止されるので、ラマダーンの断食行は日本語で「齋戒」と呼ぶほうが正確である。夜間はこれらの欲望は解除されるが、信仰熱心な人達は夜間も喫煙や性交を慎む。そのせいか、ラマダーン明けの祝祭時にはイスラーム圏ではどこでも結婚ラッシュになる。ラマダーン期間中のテレビ・コマーシャルにウエディング・ドレスや結婚披露宴の宣伝がこれでもかというくらい流されるのは、このためである。

断食の期間中は親戚・縁者を訪問しあって、日没後の食事（イフタール）を共にすることが盛んであるので、この期間に結婚式の準備を整えることができるのであろう。ラマダーン明けの祝祭時には親戚や友人たちが集まりやすいという便利さもあるかも知れない。

このようなイスラームの祭礼では、政治的な安定が保たれているときには、ユダヤ教徒やキリスト教徒の隣人を互いに招き合って、食事や茶菓を共にすることが一般的であった。今日でもキリスト教徒のクリスマスの祝宴にムスリムの隣人が招かれることは日常の習慣でもあるが、今日ではムスリムがユダヤ教徒を招くことは、ほとんどなくなっているのは残念なことである。